

## 指導救命士による 同乗指導を経験して

花巻市消防本部 花巻中央消防署（岩手県）  
消防司令補 小瀬川 正尚

### はじめに

花巻市は、岩手県内陸部のほぼ中央部に位置しており、西の奥羽山脈、東の北上高地に囲まれ、山間地や田園風景が広がるのどかな雰囲気を感じる地域でありながら、県内唯一のいわて花巻空港があり、高速道路が東西南北に通る、新幹線の停車駅もある交通の要衝となっています。また、市内には花巻温泉など有名温泉地が複数あることや、日本百名山の早池峰山があることで、たくさんの観光客や登山者が訪れ、流動人口が多いという特徴があります。

花巻市と聞いてご存じの方も多いかと思いますが、大谷翔平選手と菊池雄星選手二人のメジャーリーガーの活躍により、その二人の出身高校のある地として全国的に知名度が上昇しております。

さて、本市消防本部は、1本部2署、2分署、2分遣所、職員145名（R6.4.1現在）で、運用救命士36名、うち指導救命士3名、救急車は7台を運用し、管轄人口約9万人、令和5年は救急4,744件に対応しました。人口は徐々に減少しているものの、救急件数は年々増加している状況で、昨年度は過去最高件数を記録しました。

### 救急活動の現状分析

本市消防本部は、特定行為を実施した症例を中心に、救急活動事後検証を実施し、基幹病院との症例検討会では、医師から直接指導や助言を受ける体制をとっています。そこでは、救急活動記録票の内容の検証が中心であるため、記載のない活動については、客観的に評価する方法がなく、救急隊長の資質に任せているのが現状でした。

過去最高の救急件数へ対応する状況において、様々

な課題や問題が表面化してきており、それらを分析すると、隊員間の連携が不足しており、もっと指導や教育をする必要があるのではとの考えに至りました。

経験豊富な救命士になると、自らの経験に基づいた先入観による所見の見逃しなど、ケアレスミスがインシデントからアクシデントに発展する状況もありました。

また、救命士有資格者として採用された若年職員は、現場経験の少なさから自分の判断や処置に悩むこともあり、迷ったまま病院連絡をすることで、うまく自らの意図が伝わらず、医師や看護師から指導を受ける状況が見受けられました。そんな状況を隊長が適切に指導できているかどうかという状況も、出場隊で確認することができません。

そこで指導救命士活用の試みとして、本市消防本部指導救命士運用要領の定めにより、救急車への同乗指導を計画しました。指導救命士が救急車に同乗し、出場から帰署までの一連の活動全般を客観的に評価し、具体的かつ実務的な指導を行うことで、経験豊富な救命士は新たな気づきを得ることができ、若年救命士は具体的な助言や指導により、更なるスキルアップができると考えたからです。

### 同乗指導を行うにあたって

本市消防本部にとって初めての試みであり、比較の出場件数の多い2つの消防署に配置されている救急隊で実施することにしました。担当する指導救命士は日勤として、同時間帯のみ同乗することとし、基本的に救急活動には参加せず、活動隊の評価を実施することとしましたが、支援が必要な場面では、一緒に活動することとしました。

出場がない待機時間は、通常の業務に加え、シミュ

レーション訓練や各種手技の確認、グループディスカッション等を実施しました。また事前に消防本部ホームページで同乗実習を実施する内容を市民に広報するとともに、指導救命士は腕章を身につけ、関係者に現場で説明することにしました。

### 同乗の結果

救急隊長や隊員救命士は、おおむね良好な現場活動を実施しており、隊員連携や接遇の面でも良好に活動できている状況が確認できました。しかし、評価の内訳は、ネガティブフィードバックがポジティブフィードバックを上回っており、必ずしも良好な活動が実施できていない状況も確認されました。

これは第三者である指導救命士の評価でないと気がつかない部分でもあり、その気づきこそが救命士としてのスキルアップの一助となり、同乗実習の実施期間中に、技術向上が確認できる隊員が存在したことからも、有意義な実習であったと感じました。

経験豊富な救命士の経験に基づく判断は、若年救命士や隊員に伝わりにくい場合があるため、確実な観察に基づく判断を、隊員に示す必要性があり、傷病者や関係者に対する接遇についても、もっと寄り添う姿勢が必要な場面もありました。

また、若年救命士や隊員は、救急隊長の指示の確認や資器材取扱いの習熟度向上、救命士や関係者の会話内容に注力して、自らも情報収集する姿勢を持つことを指摘しました。

指導救命士の総括として、活動を見られているという、普段とは違った環境にもかかわらず、取組みについては好意的に受け入れられ、救急隊によって様々な個性があるなか、リーダーシップなどよき個性を伸ばしつつ、改善すべきところは、改善につなげて、個人のスキルアップ、隊連携が向上し、住民の安心安全につながることができると感じました。また、何より同乗指導することで、私たち指導救命士自身のスキルアップを実感しました。

### 今後の展望

救急救命士制度が始まり30年が経過し、現在では実施可能な特定行為が拡大され、私たちの資質の向上が、心肺停止傷病者の生存率や社会復帰率の改善に寄与しているのではないのでしょうか。そんな状況のなかで、

心肺蘇生をしないで搬送してほしいというDNARの問題、酸素投与の有害性の研究、治療ガイドラインの改定等、過去の常識は現在の非常識といわれるような状況が生まれてきています。

また、消防本部内部では、救急隊の労務管理、増加する救急件数への対応、救急車の適正利用への対応など、様々な状況への対応が求められています。

そんな社会情勢の変化の中で、私たちは常に市民である傷病者の利益につながる救急活動の質を担保し活動しなければなりません。また、各地域の救急医療を取り巻く状況は異なるものの、普段から救急現場において住民の皆さんに接する私たち救命士に求められるものは、今後より一層大きなものになっていくのではないのでしょうか。

現在、救命士を救命士が自ら指導する指導救命士制度が誕生し、各地域の消防本部で様々な取組みが実施されていることと思います。

今回、指導救命士が同乗指導したことで、私たち指導救命士自身も知識や技術をアップデートして自己啓発をしていかないと、社会情勢に適合した適切な指導が難しいことを痛感しました。さらに、各個人に寄り添った指導を実施することが成人教育には求められ、その難しさも感じているところです。

今回、本市消防本部の取組みの一例として、指導救命士の同乗指導を紹介しました。救急隊の資質向上に努め、傷病者一人ひとりに寄り添い、結果として住民の安心安全につながることを目的とした本取組みが、皆様方の指導救命士活動の参考となれば嬉しく思います。

今後も情報交換をしながら、ともに頑張っていきたいと思います。

